



を、今まさに産まんとしており、しっぽの付け根辺りから子猫の体半分が見えていた。猫も涙を浮かべること、赤ん坊がどこから生まれるのかということ、私はこの時初めて見知った。ネトネトの子猫が産まれ、やがてグニャグニャの固まりが出てきた。ミーは自分のお尻を、ロペロ舐めたかと思うと、その固まりを食べ始めた。それが何なのか当時の私は知るよしもない。ただ、ネトネト子猫の体の紐とつながっているその固まりを親猫が無心に食べ、紐の途中で食いちぎるさまを、まんじりともせず見ていた。親猫はそれから生まれたての子猫を引き寄せ、その身体中を舐め回し、近寄ってきたもう一匹をも抱え寄せた。

このできごとは当時の私の受容力を遙かに越えていたためか、「事実」だけが鮮やかに記憶され自分がどのような感情を抱いたのかについての記憶がない。ただ、翌日はウキウキと「ミーが赤ちゃんを産んだよ」とふれ回ったことを覚えている。

人間が生まれる場に遭遇したのは、それから二〇年も後だった。その時、心の片隅で哺乳動物の生まれ方の共通点を密かに再確認している、そんな自分のタフさに内心驚いた。

### 〈産に立ち会うこと〉

私たちは、現在の暮らしの中で生きもののリアルな生や死の過程にどれ程でくわすことができるだろう。産の体験者たちでさえ、初めての妊娠や出産の前に自分の身に起こる諸事について知る機会をどれ程持つことができただろうか。



